

「CEO…」
横須賀・フリートポート…。
高野広志は祭壇の設けられている場所へ向かっていた。広志の側には少年が悲しそうな表情だ。
「悲しいのはよく分かる。私も君の痛みはよく分かる。その君が亡くなった君の兄の最後の場所を訪問したいと聞いた時に私も行かねばならないと思った…」
少年はあのデトロイトメタルシティのコンサートの仕事に出てたまたまトイレに入った際、ロンの話をうっかり聞いてしまった事がきっかけで殺された河東和樹の弟で、高校生の哲也だった。
「兄は、ロンに殺されてしまったんですね…」
「ああ…。ロンの周辺を調べたら広東マフィアが絡んでいた。しかも、彼らはロシアンマフィアから黄色い馬を仕入れて販売していた…。残された者の悲しみが彼らに伝わればいいのだが…」
ため息をつく広志。

2 日前の横浜では…。
「またしてもしくじった訳ね、この愚か者!」
「ロン社長(の身柄)が GIN に落ちてしまい、その周辺も調べられています。エミリー様、一刻も早く広東人民共和国の国籍を確保してください」
「当然対処するわよ。でも、しっかり責任者を追及するわよ」
メアリー・ジェーンに言い放つエミリー・ドーン。だが、エミリーもメアリー・ジェーンが責任回避の天才である事を知らなかった…。
「申し訳ありません、今後気をつけます」
「いいわよ、あんたは今帰仁と相談して事を進めなさい。ダークギースも協力してくれているんだからね」
そういうとエミリーは電話を切る。厳しい表情でメアリー・ジェーン・デルシャフトは闇のヤイバに話を持ちかける。
「あの女だな」
「そういう事よ。相当ご立腹よ」
「肅清しなければなるまい、スケープゴートが必要だな」
「ヤイバ、今回ダークギースは処分対象外にするけど、誰を始末したらいい?」
「ヘンリー・ストリーターだな。奴のクラッキングシステムは完成してこちらにもノウハウを得た。奴は用なしだが、もう一人いる…」
「あのクイズバカね」
「あいつは口が軽い。早めに肅清しておく必要がある」
「そうね…。やってしましましょう…。ドワイヤー、聞いたかしら」
「ヤイバさま、ジェーンさま、がじごまりまじだ」
ナイフを片手にリーベルト・ドワイヤーは舌なめずりする。浅倉威がニヤリとする。
「明日には香港へひとつ飛びだ。こちらにも日本におけるメビウスのアジトは完成した。本部で後は俺達の支配体制を確立するだけだ…」
「あいつは早めに始末しておかねばならない…」
だが、その会話はクイズバカといわれていたエドワード・ニグマには筒抜けだった…。

「未だに開き直るとは、ふざけるなよ…」
GIN・横浜拘置所では…。
剣崎一真が厳しい表情で対峙していたのはあのマーク・ロンだった。剣崎の厳しい取り調べでロンの命令を受けた手下達が河東和樹を絞殺した事を認めた上、違法薬物の取引にロンが関わっており、違法収益の一部がロンに入っていた事を自供していたのだ。
「私には関係ありません。インターネットは一つばかりじゃないでしょう」
「すでにお前の言い逃れは無理だと分かっている。ログオン記録から全て分析はすんでいる」
苛立つ剣崎に肩を叩く青年。
「睦月」
「剣崎さん、焦らない事です。ロンさん、あなたの部下の供述を裏付ける証拠はもうそろっています。あなたが逃れられると思うのなら、無理な話ですよ」
上城睦月は淡々とした口調で話す。彼は気が弱そうに見えるが実は相当な切れ者で、GIN に加入してから水を得た魚のように大活躍しているのだ。
「サウザーとのつながりでも、企業の買収計画でも暗躍した事は俺達が知っている。お前はもう終わりだ。潔く自供したらどうだ」
「私とは全く関係ありません」
「ふざけるな!俺達は内偵で証拠を完璧に集めている。お前がいかにあがいても上海証券に闇講座を持っていて、企業株式の時間外取引に使われていた事や脱税に用いられていた事は知っているぞ」
「涼宮ハルヒ議員に違法な献金を行っていた事は我々のチームが把握しています。もう、あなたは逃れられません」
「証拠はどこにあるのでしょうか。説明しますよ」
「証拠も何もない、お前が奴と話した会話通信記録が全てだ」
その瞬間、ロンの表情が青ざめる。そこを二人は見逃さない。
「ついでに話しますが、あなたの周辺はしっかり見張っていました。あなたの愛人にも同様に厳しい捜査の目はありました。我々は調べている事を悟られないよう苦労しましたがね」
「俺達は潜入捜査が得意なんだ。もう、お前が言い逃れしようとも無理だ」

厳しい表情で剣崎が迫る。冷や汗を流すロン。睦月はタオルを差し出す。
「被疑者には黙秘権があります。あなたには黙秘する権利があり、弁護士をこの場に付き添わせて事情聴取を受ける権利があります。ですが、我々には真実を追究する権利が同時にあるのです。あなたはその権利を尊重してもらわねばなりませんよ」

「兄は最後まで…」
哲也は祭壇に手を合わせ、悲しそうな表情になった。
「ああ…。あなたの兄は最後まであなたの為生きようとした…。本当に強い人だった…」
広志はつぶやくと、花束をささげる。
「ロンの事情聴取はどうなっているんですか」
「彼本人は容疑を否認しているが、手下達が自供している。周辺の証拠も集まっており、彼の起訴は確実だ。だが、死刑判決は憲法や国際法のかねあいもあって出せない。分かってくれ…」
「なぜ…」
「憎しみが憎しみを招くからだ。死刑にして執行しても、失った者の喪失感や虚脱感は変わらない。逆に言えば、死ぬ自由を奪い取り、死ぬまで過酷な環境に叩き込み、冷たい視線において加害者を苦しめさせる事が最大の復讐でもあるという事だ。誤解しないで欲しいが、私はロンを許すつもりなどない…」
広志は厳しい表情で話す。それは10年前のアジア戦争で、瀬戸内海での最終決戦で感じた事だった。テロリストの忌まわしい牙から広志は必死になって戦い抜いた。そして、多くの悲しみを背負って生きてきた。
「あなただが、高校卒業後どうするつもりだ」
「大学に進学したいんですけど、無理ですね…」
「大丈夫だ。私が男爵の地位を使ってスコットランド王朝に掛け合っておくさ。場合によってはグラスコー大学に留学出来るように取りはかる。ただし、あなたの学力次第だね」
「お願いします。生活費はどうするんですか」
「生活費も含めて、面倒は見るよ。あなたがこの国に戻り、この国の為できる事をするのなら、私にはそれだけで十分だ」
『ピーッ、ピーッ!エマージェンシー!エマージェンシー!!』
その時だ、広志の着信メッセージが響く。

その頃、GIN 相模原支部では…。
「名前はエドワード・ニグマ…。アメリカでハイテク犯罪を犯し、広東人民共和国に引き取られていたが、なぜここにいる」
「メビウスが俺達を譲り受けたんだ。あのメビウスだ」
「メビウス!?!」
捜査官が驚く。エドワード・ニグマはアメリカで「リドラー」という名前でクイズにちなんだハイテク犯罪を繰り返して、懲役120年に服役していたのだが、広東人民共和国が彼を引き取っていた。その彼がああ武器商人を中心とした犯罪集団・メビウスに絡んでいたというのなら重大だ。
「ヘンリーと一緒に俺は逃げてきた。頼む、あのダークギースに殺されるのならGINの刑務所にいた方がましだ」
「これはまずいな…。アメリカに二人をかくまわせよう…」
橘朔也(GIN 相模原支部支部長)が厳しい表情で話す。普段は橘の補佐を務める相川始もきびきびとした表情で動き始める。彼は仲間達の中でジョーカーというあだ名があるのだ。
「同感だ、橘。俺は急いでブルース・ウェインに話をつける。ヒロにはお前で話を頼む」
「ああ、まずはヒロの許可一つだ。リチャード・キンブル医師に奴らの診察を行ってもらい、その上で拘束着をつけて奴らをアメリカに送り届けよう」
キンブル医師は相川の主治医であり、殺人事件に巻き込まれた時に無実を証明したこともあって信頼関係が強い。そこで、相川はホームドクターとして相談相手になっていた。

「そういう事ですか…」
広志は厳しい表情で電話に出ていた。橘は必死に説明する。
「お前の許可を得たい。エドワード・ニグマとヘンリー・ストリーターを大至急アメリカに移送して欲しい」
「では了解しました。超音速戦闘機で彼らをアメリカに送り届けるよう野中さんに即刻指示を出しましょう」
超音速戦闘機といっても、重油は使わない。GINとモルゲンレーテ、アメリカのゼネラルアックスが共同で開発した核融合エンジンを用いた超音波戦闘機である。この種の改造を広志はエズフィット紛争で得たアメリカ軍のステルス戦闘機・ラブターや旧ロシア軍から購入した戦艦、潜水艇に施していた。そのためGINの戦闘力は一国並の威力を持つ。それゆえに広志は恐れられてもいるのだ。しかも、広志が策略にも長けている切れ者である。
「では、準備に入ります。野中さんから連絡が入りますので、手配をお願いします」
「すまない。相川はすでにアメリカと連絡を取っている」
「さすがです。ジョーカーと言われるあだ名も領けます」
そういうと広志は電話を切る。そして即座に電話を掛ける。
「野中君、高野です」
「CEO、久しぶりです。今パニョと一緒に訓練プログラムを作成していました」
「大至急、君の部下に用事がある。超音波戦闘機で二人の罪人をアメリカに送り届けてくれないか」
「了解しました。詳細はどういう事でしょうか」
野中宗介は即座に答える。彼がGINでの軍事部門のスタッフなのだ。
「先ほど、相模原支部にメビウスの関係者二人が自首した。どうも奴らの組織に関わる秘密も握っている。大至急アメリカに送り届け、USGINで彼らの事情聴取をさせ、生涯ネットワーク犯罪摘発班に組み込ませる処分を行うよう要請を行う」

「かしこまりました。それと、ステルス戦闘機・ナイトホークの譲渡交渉はどうでしょうか」
「ベネット大統領にはすでに了解を得た。相手は軍事機密を盾に譲渡を拒んでいたが我々があのエズフィット騒動で両方の和解に動いたため大きく譲歩した。ただ核融合エンジンについてのノウハウをアメリカに同時に提供する事が条件だが、そこには流出できないように規制をかけた上悪用禁止の条項を盛り込んでおいたし、独自のエンジンを開発しないようにという条件をつけた。もっともこちらにはラプターマーク2がある。拒まれても手は打てる」
「さすがです。そうじゃないと僕らの苦労は水の泡です」
「そこが外交官としての腕の見せ所だね。かつての日本の外務省の無能ぶりには私もかなり苛立っていたさ。謀略もフェアプレイの一つにすぎない。かつての日本はウブすぎた」
「ポニョに代わりましょうか」
「いや、遠慮しよう。彼女が元気なのは君の声で分かる」
ポニョと名乗る女性は宗介の公私に渡るパートナーである藤本あかりである。
「では、然るべく動きます」
「分かった、頼むぞ」
そうして、エドワード・ニグマ達はアメリカに移送される事になった。だが広志達は予想だにできなかった。メビウスが広東人民共和国を事実上支配下に置き、世界中の資産を独占して稼ごうという野望を持っていた事を…。

その翌日の千葉ニュータウン・ヴァルハラ千葉ニュータウン総合病院では…。
「ハアハア…、すみません…」
「小池さん、無理はダメだ。あんたが精一杯説明しているのは俺達が知っているんだ」
黒崎高志は小池史裕に声をかける。
「選手達が頑張っているのに、私が頑張らないのは…」
「あんたが証言してくれたおかげでロン達は捕まった。俺達はあんたを支えるよう親父から頼まれているんだ」
「親父？」
「亀田さんさ。俺にとっては第二の親父だぜ」
黒崎は笑って答える。その時だ。広志が背広姿で入ってくる。
「久しぶりだな、クロさん」
「ヒロ、あの捕物以来だな」
広志は黒崎と笑って答えると小池に向かうと一礼する。
「まずは遅くなりまして申し訳ありません、公権力乱用査察監視機構の高野広志です。あなたの協力があってあのマーク・ロンと涼宮ハルヒの摘発につながりました。心より感謝します」
「私こそ…、選手や社員たちを救ってくれて…、ありがとうございます…」
「あのことは当然ですよ。あなたの想いを誰も分かっていますよ。また、あなたの背負うべき債務は私がスコットランド王朝に頼んで負担してもらいました。あなたの退職金も規定どおり払いますので、ご安心を。良心の呵責がある限り、私はあなたを守ると約束しましょう」
そういうと小池をベッドに寝せる広志。広志はスコットランド王朝から伯爵の位を与えられており、その財産は莫大である。それもそのはず、スコットランドから取れる石油や天然ガスの収益の1%がスコットランド王朝の財政立て直しに協力した広志の収入になっており、それがブラックプラチナカードの所有につながっていた。そこへ入ってきた医師が驚く。
「おや、高野さんやないですか」
「伊野さん、さすがに『グレートファイブ』だけありますね」
「相変わらず行動範囲が広いですねあ…」
伊野治は笑うと黒崎に小声で話す。
「高野さんを私に貸してくれへんか」
「いいさ。小池さんを寝かしつけるには都合がいい」
広志はうなづくと伊野と中庭に向かう。

「この前、檜君たちが訪問してきたんですよ」
「彼らが？」
伊野の話に広志はかすかに驚く。
「檜君たちは『オーナーは悪くない、助けてください』と高志に頼んできたんですよ。高志は思わず涙ぐんだそうですよ、氷柱さんの話によると」
「彼がですか…。おそらく、本当の家族を失った事を思い出したのでしょうね…。彼女以外にめったに見せない涙を見せるとは…」
「GINから高木君を派遣してもらっているでしょう、助かっていますよ。彼は小池さんの体調に配慮して事情聴取をしながら情報収集をして、確認を取る形で事情聴取が進んでいます」
「それぐらいしか私にはできませんよ。すみませんね」
「それに、養子たちが小池さんや病室の患者たちに希望の存在になっているようですよ」
伊野の言う養子とは、高木護の養子で双子の笹倉薫・友樹姉弟である。高木は2ヶ月前に後輩と結婚したが、その以前から二人を養子にしていたのである。ちなみに黒崎も伊野の養子であり、彼らを自分と同じ境遇にあると思っておりがかわいがっていてもいる。高木はあの本郷由紀夫の秘書官を勤めており、情報収集に長けている。
「それは良かった…。あの子達は明るい性格です、暗い雰囲気では患者さんたちも悲しいだけじゃないですか。それに、小池さんですが容態は思わしくないようですね」
「どうやら、そうですね…。私も厳しいと認識しております…」
「できる限りの支援は保証します。伊野さんの力がここはさらに必要です、お願いします」

「何とかならないのか、この状態」

そして代々木にある「花鶏」。

新宿にある「プリズム」編集部のメンバーがよく集まって食事する。オルバ・フロストが来社する回数が減って経営不安がささやかれる始末である。重田俊明編集委員はいらだちを隠せない。

「重田さん、ここは『金はあるけども書きたい事が書けない』じゃないですか。すごくいらしているんですけど」

「何しろ、壬生国騒動の時には喪黒の賛美記事ばかりか書かれて私の担当していたノンフィクションはつぶされたのだからな」

城戸真司にばやく重田。城戸は「プリズム」編集室で記者として正式に採用されているが企業の提灯持ち記事ばかり書かされているため正義感の強さと単細胞ぶりで反発している。元々プリズムはニュース配信会社「ORE ジャーナル」を吸収合併しているため、彼は市民記者から採用された。ルポタージュに興味があり、休日はバイクに乗って取材をしている行動派である。

「ひどいっすよね」

「そうだ、だが現実には君のような人は浮いてしまう。苦々しい。まあ、君はいい意味でバカだからな」

「勘弁してくれよ、それは」

「事実だろうに、真司」

憎まれ口をたたく青年。彼は花鶏の従業員である秋山蓮という。手先が起用でレストランでは重宝がられている。だが頑固で喧嘩っ早いのが欠点である。

「真司さんたち、いつその事プリズムから独立したらどうですか」

「独立？難しいよ、資金繰りどうするんだよ」

女子大生でアルバイトの神崎優衣に言われて戸惑う真司。真司とは同じ大学に通っている。優衣の兄である士郎が不安そうに言う。

「俺も不安だ、城戸」

「先輩、じゃあどうしろって言うんですか」

「俺が所属している会社を経営していた人に相談を持ちかけよう。きっといい知恵を授けてくれる」

士郎は溝江則章が1ヶ月前までオーナーをつとめていたヴァリュー・クリエーションに勤務しており、溝江がゴリラ退職者の年金基金を運営する会社に会社を売却して引退した後も溝江とは仲がよい。元々はMIT(マサチューセッツ工科大学)出身であり、ヴァリュー・クリエーションの技術投資部門を受け持っていた。

「そうですか、これはとんでもない状況ですね」

東京・町田市の溝江邸では…。

溝江則章と妻の観月が資料を見て陰しい表情で話す。士郎の紹介で重田と真司はプリズム再生のビジネスプランを説明していたのだ。

「まあ、資金は問題ない。ヴァリュー・クリエーションを売却して、今度柊親子と既存のものづくり企業や地域に根ざしているが経営危機にある会社を支援する投資ファンドを立ち上げる予定だった。それとは別でやるとするが、こればかりはきちんとした信頼性が必要だぞ」

「そう言えばそうでしょう」

「プリズムは今まで売らんかいなの記事ばかりだった。俺も正直に言っていたら。俺は売らんかいな記事が大嫌いだ」

「ねえ、ノリちゃん。中込さんに話してみれば？あの人ならきっと協力してくれると思うわよ」

観月が則章に言う。ニヤリとする則章。

「なるほど、先々週の「人物発見伝」の借りを返してもらおうか」

パット記者がアポイントを取って「中込さんが「次回の人物発見伝には溝江さんを」と指名してきた」として人物発見伝に先週の週刊北斗に取り上げた事に苦しいしていた溝江だったが、今回はきっちり借りを返してもらう事になる。結果として、溝江の違法行為の疑いは人物発見伝で消えた。

溝江と中込威は東大の先輩後輩で、中込が溝江の先輩にあたる。二人は「最高のライバルでもあり最高の仲間」と互いに認め合い仲がいい。また溝江のあだ名であるノリちゃんを付けたのは中込で、妻の観月も気に入ってそう言っているほか、中込の実家のある佐賀県鳥栖市から溝江はよく海苔を取り寄せている。逆に中込は鍋物にかかせない牡蠣を観月の実家のある広島県福山市から取り寄せている。それほど互いに信頼している。

だが、新たな激震が全日本テレビで起きていた。

極亜テレビ本社のある東京・千駄木では。

「本当にいいのか」

ロコの水野鈴芽に確認をとるのは高嶺清麿。

「もう、我慢できない。テレビでバカを演じるなんて耐えられないよ」

「ルルーシュ代表幹事から話を聞いたが、ひどいパワハラだな」

泣き崩れる鈴芽に困った表情なのは公権力乱用査察監視機構の本郷由紀夫である。ルルーシュが極亜テレビの番組に新党についてインタビューのため出演した後、ロコのメンバーによるインタビューがあった。だが、鈴芽の表情が何かおかしい事に気がついたルルーシュが話を聞いた結果、全日本テレビでのパワハラが発覚したのだ。

その後動いたのは清麿である。清麿はGINに所属しているガッシュ・ベルと相談、そこへガッシュと昵懇の仲にある本郷が協力してGINが動き出したのだった。

「お前のボスに話してあるのか」

「もう話してある。この問題は明らかに深刻だな。オーディションで普通のルポタージュのレポーターを募集していると思ってきたら破廉恥な事を強要されていたというなら、ひどい。CEOも渋い表情で呆れていた」

「私以外に被害者がいたなんて、困ったわね…」

困った表情で話すのはミレイ・アッシュフォードである。彼女は以前、汐留にある全日本テレビに天気予報キャスターとして勤務していたが凄まじいまでのセクハラにさんざん苦しめられていた。その事を知った GIN の高野広志 CEO は知り合いの金上鋭に話を持ちかけ、ニュースキャスター見習いとしてミレイを極亜テレビにスカウトさせた。それから彼女はニュースキャスターとして、壬生国騒動や関東連合政変を第一線に立って報道し、勉強も重ねてきた。

「彼女も被害者だったわけだな」

全日本テレビから極亜テレビの制作部門子会社・極亜クリエイティブ社長に就任したディートハルト・リードがつぶやく。彼はルーシュやその兄であるシュナイゼルとも親しく、ノンフィクションで極亜テレビを日本屈指のトップブランドにした立役者である。

「俺の会社も、けっこう視聴率には厳しい。だが、倫理規定がある。パワハラまがいの要求は禁止だ。それに、チャリティーでは背中を刺されるような事は禁止されている。全日本テレビでは平気で行われてきた。だから、俺は辞めた」

川崎の広志邸では…。

「チップを払う習わしってあるんだ」

「そうです、先輩」

黒髪の美少女が笑みを浮かべてのため(本名・野田恵)に説明している。あのセーラ・クルー、いや今は鬼丸セーラだ。

「しかし、君はどうして高野 CEO と知り合って、メイドみたいな事をしているんだ」

「CEO はシュナイゼル様が逮捕された際に私をかばってくれた上、元気君や義父にも手をさしのべてくれたんです」

「しがない役人だった父さんを認めてくれてここまで抜擢したんだ、僕にとっても恩人だよ」

「おいおい、恩人とは光栄だな」

渋い表情で入ってきたのは高野広志だ。青年が素早く広志に駆け寄る。のれめと婚約を交わした千秋真一である。

「冥王さんが生きていたって、本当だったんですか」

「すまなかった。命の危険を考え、彼女の生存については今まで伏せていた。伊達が説明して一同納得したようだが、君達には嘘をついてしまった事を改めてお詫びする」

「したたかすぎです」

「命に関わる事だ、ウツカリ喋ってしまえば取り返しのない失策になるからだ。そのために分からないとしらを切っていた」

「マーク・ロンとあの涼宮ハルヒに繋がっているとすれば、あの男ですか…」

元気(ウルフライの長男、セーラと同年)が声を落として話す。

「断言はできない。証拠がない限り、無罪推定原則がある。ロンの不正はがっちり押さえてあるが、まだまだだ」

「俺も納得ですね…」

「真一君」

「高野 CEO は法律に従っているんだ。俺達がどうこう言っても動けないよ、恵」

「ところで、いつ部屋を一つにするつもりだ。それに合わせて非番にして、引っ越しの手伝いをするが」

「いや、すでにめどがつきました。後は衣装の引っ越しだけです」

「分かった、では今日の夜に動こう」

広志は腰が軽い行動力を備えてもいるのだ。そのときだ。

「ヒロ、根岸崇一という人が相川由利って人と一緒にここに来ているみたい。千秋君とも知り合いみたいで会いたがっているわよ」

「分かった、面会室に通してくれないか」

美紅に頼むと広志は千秋に確認を取る。

「根岸君は君と知り合いなのか」

「あいつですか? そうです。実は高校で一緒でした。あいつはトロンボーンの腕を買われて推薦入学、俺は一般入学でしたよ」

「一般入学のほうが強いだろうに」

「でも、あいつは何をやってもできました。俺も嫉妬したほどですよ」

「千秋さんがそんなこと…」

セーラが驚く。千秋はこくんとうなづく。

「ある意味、互いに認め合う仲でもあったんだな」

「あいつが歯の矯正でトロンボーンができなくなったときに俺がギターを奨めてしまったんです。その結果あんなことに…」

「気にするな、それは生き様で見るしかないさ」

面会室に広志、千秋、恵、セーラ、元気が入ってくる。

驚きの表情で根岸と由利は直立した。なだめるのは美紅。

「高野 CEO…」

「緊張するな、事情聴取は済んでいるだろう」

「この前のカミュのことで迷惑をおかけしました」

「もういい、彼の罪は彼自身で償うしかないんだ。だが、我々は更生した後見捨てるつもりはない、案ずるな」

根岸に声をかけると広志は CD を入れた。

「これは…」

「私はスコットランドに一時期いて、その音楽隊の演奏を録音したものなんだ。トロンボーンの響きがすごいだろう。君はもう一度、トロンボーンの世界に戻るつもりはないのか?」

「でも、今の僕には…」

「ブランクは関係はない、待っているさ。あんなひどい格好をさせられて苦しんできたんだ、仲間じゃないか」

千秋が声をかける。

「仲間…」

「そうだ、無残な表現に責任を取ってデトロイト・メタル・シティを解散しただけで十分だ。これからは『テトラポット・メロン・ティ』と両

立していけばいいじゃないか。そして、過去はいつの間にか消えていくものだよ」
「ギターのポジションは誰もいないんだ。君にギターを頼んだっていい。クラシックギターだって一つのジャンルじゃないか」
「先輩、いいんですか」
「いいんだ。川崎シチズンオーケストラだって、新たな時代に対応していかなくちやダメなんだ。棒振りと演奏者がいい意味で磨きあい、ぶつかりながらいい音を作っていくんじゃないか」
「受け入れたほうがいいじゃない」
「由利…」
「本当の自分のやりたいものを、認めてくれた仲間じゃない」
「…」
広志は優しいまなざしで見つめる。
「高野 CEO は辛い生き様をしてきた。僕も、恵も言葉を失うような壮絶な過去を背負って生きてきた。だから、恵の苦しい過去を見抜けたんだ」
「彼女は発達障がい当事者なんだ。まあ、ほんの一部抜けていても、どのような生き様なのかで変わってくる。たとえサッカーがうまくても、やってはいけないことをして反省しないのならそれは糾弾されたまま終わってしまう。彼女が発達障がい当事者であっても、それを理解する相棒がいたから、ここまで世界に上り詰めるまでに来たわけだ」
「恥ずかしいです…。アジア戦争の英雄にそんなことを言われるなんて…」
恵は思わず顔を赤らめた。千秋と恵が喧嘩したときにたまたまいた広志が両方の話を聞き、なだめた。二人は広志の過去に興味があった。そこで知らされたのが、10 年前の遺伝子化学を使ったテロ集団・イムソムニアによるテロ戦争、あのアジア戦争を終わらせた立役者の一人だったと言う事実だった。そしてその終結と引き換えに広志は過酷なまでの傷と闘病生活を余儀なくされた。そして、18 の赤子と一人の無脳児の犠牲の上に成り立ったファースト・デザイナーズ・チルドレンだった事実にも苦しめられた。
「百人の命を救えなかった私を英雄だなんて、言われるほうが悲しいものだ…。ましてや、出生のときにさまざまな犠牲があった。その事実にも未だに苦しんでいる。この悲劇は繰り返さないと決めたのも、美紅の存在が大きい。事実が分かって私が自責の念に駆られていた時に『そんなヒロを守る』って言ってくれた。だから、ここまで歩けたのかも…。それは、オーブの盟友であるキラも、同じ立場だからだ」
「僕が恵を守るって決めています。CEO が美紅さんを守るように」
「それでいい。守りたい絆が誰にもあるんだから」
「事実を知って、どれほど辛かったんでしょうね…」
セーラが広志に話す。
「誰のことだい？」
「ヒロさんじゃないですか」
「私は初期の実験体であっても、それほど苦しいとは思わなかった。むしろつらかったのはキラたちを巻き込んでしまったことだった…」
「それが辛いかもね…。自分ひとりでしょい抱えていたほうが楽なのかもね…」
根岸と由利は広志の存在感の大きさを感じざるを得なかった。辛い生き様を抱えながらも、自らがきつい路を率先して歩むことで誰も犠牲を背負わずにすむ。あの「俺王」だった千秋が広志を尊敬するのも、そうした生き様を抱えながらも、前に進む広志の姿勢に尊敬の念を抱えていたのだろう。穏やかな笑みを浮かべて広志は話を打ち切る。
「さあ、重苦しい過去の話はここでやめにしよう。さて、ギターの競演だが、どうするか」
「3ヶ月後にできませんか？」
「いいさ、で曲はどうする？」
「ハンガリー協奏曲にしたいと思っています。あれならできます」
「良かった…。お前、次は何を選ぶつもりだ」
「ジャンルは広げるだけさ。こんな僕でいいのなら」
千秋と根岸は握手を交わす。この交流は、後に薬物撲滅運動「アクトアゲインストドラッグ」につながっていく。

5 日後の「週刊北斗」編集部。
「ケン、いったい全日本テレビはどうなっているんだ」
パット記者は戸惑いながら霞拳志郎に聞いている。
「スポンサーが離れていっているんだ。しかも、プリズムに帝都新聞社とデジタルキャピタル、クルークの 3 社が合併で新会社を立ち上げた上、広告代理店事業はデジタルキャピタルが経営権を買い取る事が決まったそうだ」
「そうすると、全日本テレビは収入源が減るわけね…。深夜放送をやめたのも当然ね」
「まあな。自業自得じゃねえの」
呆れ顔の風見ジュウザ。
「ジュウザの奥さんから情報は聞き出しているのか」
「バカヤロウ、そんな事聞き出して見ろ、俺もシツカもマルタイ(警察用語で逮捕)だろうに」
週刊プリズムの発行会社は「帝都デジタルメディア」になり、市民メディア事業部を受け持っていた大久保大介が社長に就任する事になった。ちなみに大久保は週刊北斗とも友好関係を持っている。
「マニアークの近藤さんが応援にでているそうだ。彼女の後輩は地域密着型の週刊誌を多く立ち上げてきている、プリズムも無事再生すると思う」
「プリズムが再建されないと、週刊北斗だけでは偏ってしまうと思います、編集長」
「そうだ」

「というわけで、君たちには会社が変わるだけ責任を持って報道に取り組んでもらいたい」

大久保が訓辞を行う。右に立つのはジーンズ姿の女性である。
「なお、プリズム副編集長には桃井君を起用する」
「どうしてですか、私よりもっといい人が」
戸惑う表情の桃井令子。彼女は 24 歳だが疑惑解明のためならば、些細な事でも徹底的に追求する有能さと、危険な仕事でも逃げないジャーナリズムを併せ持つ。
「僕が推薦した。僕らは月刊プリズムに回る」
「ジャーナリスト魂なら、あなたが優れているわ」
ダニエル・ミードと姉のアレクシスがはっきり言いきる。二人とも、オルバ・フロストのやり方に反感を感じていて、週刊北斗ともつながりがあった。そのため重田は二人に月刊誌として成績不振に陥っている月刊プリズムの再生を託したのだ。
「アレクシスさん、男装がうまいんですね」
「それぐらいいなくちゃ、いい記事は書けないわよ」
笑顔で言い切るのはアレクシス。彼女はスーパーモデルだが、大学でジャーナリズムを勉強していたのでそのままジャーナリストになった。松永さとみ(帝都新聞社社会部記者)の先輩にあたり、週刊北斗のメンバーにとっても強力なライバルにあたる。
「ダニエルの相棒はもう、決まっているのか」
真司が疑問に感じて聞く。ダニエルはジュウザに似ていて女遊びの癖がややひどい欠点がある。だが、事実を素直に書く真摯な姿勢は誰からも認められている。
「私がそうなんだ」
「今回、僕自身で選んだ。見かけよりも中身だ。秘書であり、外回りにも強い。僕にとっては無二の相棒同然だ」
戸惑う真司。ベティ・スアレスはまじめでやり抜くと決めた事はやり抜く頑張り屋だ。だが、ルックスやファッションセンスがややいまいちでアレクシスがいつもアドバイスしてくれる。ダニエルのアシスタントとして選ばれ、ダニエルを陥れようとしている輩の企みを暴き、ダニエルにオルバ・フロストが手が出せないのも彼女の存在が大きかった。
「まあ、今後も僕らは共同記事を書き、あなた方にも協力をいただきたい」
「頼むぞ、編集長」
パソコンでプログラムを書いていた女性がホッとした表情で立ち上がる。
「これで、週刊プリズムのシステムは全て更新されたわ。後は月刊プリズムだけど、ロゴだけ変えてしまえばオーケーね」
「ホッとした。オルバ・フロストが介入してきたらたまったものではない」
重田に労をねぎらわれた女性は島田奈々子である。「ORE ジャーナル」出身でシステム担当を受け持っている。コンピューターに関する知識は一流でハッキング阻止のシステムは彼女が構築しているのだ。ちなみに京葉大学大学院にいる小川恵里はいみじくもあの秋山蓮の恋人であり、奈々子の先輩に当たる。

「というわけだ。あなた方とこれから一緒に戦おう」
ダニエルの挨拶が終わる。
徳島でコミュニティ雑誌を発行している山田波美が戸惑いながら聞く。彼女はオルバ・フロストに買収される前のプリズムのメンバーで、彼女が徳島にある夫の実家であるコミュニティ新聞社を引き継いだ事がきっかけで退職した後にプリズムはニューウェーブという持ち株会社の傘下になった。
ちなみに「ウェルかめ」といコミュニティ雑誌は徳島の枠を越え、オーブにも普及している。
「前編集長はどうなるんですか」
「解雇はあり得ない。僕は編集長としては新人だから、共に学んでいければ、最高です。肩書きは関係ない」
「そこまで言うなんて、すごいわな。浜ちゃん」
吉野鷺知前編集長が言う。ダニエルとアレクシスは彼女の才能を認めていたため、副編集長として残留を要請した上にムック部門の責任者として選抜した。ファッション工房「マニーク」を主宰する近藤摂子と今後コンビを組む事になり、ムックの名前は「IROHA(色葉)」とする事にしている。ちなみに浜ちゃんというのは波美の旧姓である浜本からである。
「あなた達はいままで営業も兼ねていたでしょう、営業は私が引き受けます」
「アレクシスさん、本当ですか」
「その代わり、ジャーナリスト魂を発揮してくださいね」
「それに、月刊プリズムはレイアウトがうまい。ロベルトさん、今後お願いします」
「編集長、ワタシこそよろしくお願いします」
ミラノ出身のイタリアからの移民でロベルト・マンツォーニがダニエルと握手を交わす。実は編集長である吉野とは夫婦である。両親をイタリアから呼び寄せてイタリアのパンを売る事が夢である。
勅使河原重之副編集長が縮こまっている。ベティが声をかける。
「勅使河原さん、大丈夫です。私たちはあなた方を週刊プリズムの植民地として扱うつもりはありません。むしろパートナーなんです。あなたには副編集長を兼任したままで文庫部門の責任者をお願いします」
「恐れ入ります。前のオルバ・フロストは私の記事をさんざん改竄して、抗議をした私に金を握らせようとした。だからブログで告発しましたよ。そうしたら文書管理に飛ばされていました」
「ひどい奴だな。ニューヨークタイムズの経営者はアメリカのニクソン大統領のウォーターゲート疑惑つぶしに毅然として戦った。オルバ・フロストは真逆でつぶそうとした。もしあなた方が逮捕されるのなら、この私が警察に出頭する覚悟ができています」
苦々しい表情でダニエルがつぶやく。
「ところで、勝乃新先生はどうだ?オーブ王立大学で講師を務めていると言うが」
「勝乃新ですか?インディ先生と共同で研究旅行に行ったりして忙しいですよ」
波美が勅使河原に答える。山田勝乃新は波美の夫で、1 つ年下だがオーブ王立大学で海洋学の講師を務めている。その海洋学の知識を買われてインディ・ジョーンズのアドバイスを勤めている。
「まず、再建案だがネットとの融合を進める。端末での販売を強化する。印刷コストが減るだけ、値段は安くなる」

「時代の趨勢ですからねえ…」
「また、週刊誌のほうだが大幅なリニューアルが決定している。僕らもリニューアルするが、君たちからもアイデアを聞きたい。よって明後日土曜日に休日ではあるが会食をしながら会議をしたいと思う」
「参加費用はどうするんですか」
「僕が出す。当然だけど、アルコールは御法度だ」

「へえ、新たな連載メンバーにプリズムは変わるのね」
「ああ、前からこんな雑誌にしたかったんだ」
再び「花鶏」。
週刊プリズムの重田俊明編集長が花鶏オーナーの神崎沙奈子（45歳、士郎と優衣の叔母）と話している。
「しかし、若いのに大変ね。ジャーナリスト志願者を下宿させるなんて」
「プリズムは変わって行かなくちゃだめだ。それはオーナーのあなたにも分かるでしょう」
新たな執筆陣は前の涼宮ハルヒ、サウザーや国家主義的な主張とは全く無縁な人物である。
「沙奈子さんにも加わってもらいたい。今まで海外旅行をしてきたのだから面白い」
「冗談でしょ。本当にあなたは困った人」
クスッと笑う沙奈子。新しいプリズムでは溝江則章顧問が直々に交渉をして執筆陣を一新した。村田雄二郎と村田雄三郎による「味皇と味将軍・その信念を語る」では村田兄弟の生い立ちや味への思いを語り下ろしているほか、元ミキストリメンバーの作家・ダニー・エルフマンによる自伝、日本のものづくり現場を取り上げる「日本のプロフェッショナル」の他に、オラシオン証券社長である金上鋭の日記「金融市場日記」などで成り立っている。
デジタルキャピタル、帝都新聞社、クルークの3社合併で再建をはじめたプリズムは信頼を取り戻し、週刊北斗と肩を並べるまでに回復していくが、これはまた別の機会と言う事で。

そして横浜市では…。
「巢来間、これがあの男の住所なのか」
「分からないぞ、戸籍自体がないのはいったいどうなっているんだ」
ミュージシャン風の男にぼやくのは巢来間風介。横浜市中央区役所で戸籍係を務めている。
「しかし、あの報酬はおいしい。もっと金をつり上げてやるぜ」
「ああ、是非そうしてくれ」
二人が話しているのは高野広志の住所を突き止める依頼である。だが、結果は全く分からない。戸籍自体がないのだ。
「GINは戸籍自体が別途あるはずだぜ…。奴らは警戒が非常に強い」

そして、東京は青山では。
喫茶店「バンジー」に入ってくる普段着の男。
「よっ、ヒロさん」
「亀田さん、お疲れ様です」
男は高野広志であり、亀田と言われた男はゴリラの指揮官を務める亀田呑である。そしてトイレから若い男女が出てきた。呑はすまなさそうな顔である。
「すまねえな、金がないから和式のままで」
「高野さんじゃないですか」
「ああ、足のリハビリはどうなっているんだ、さくらさん」
「徐々に曲げられるようになってはいるんですけど痛くて」
朝倉さくらは彼氏である紫原ユウキに手伝ってもらい用を足さざるを得ない、というのは彼女は交通事故で腎臓と肝臓、両足に大きなダメージを受けたからだ。腎臓と肝臓は移植手術で治療できたが副作用としてトイレが近くなってしまった上、両足は洋式なら腰掛けられるのだが和式だとしゃがみにくい。それでユウキの肩を借りてしゃがみ込み、見てもらいながら用を足さざるを得ないのだ。
「でも、ヒロさんのセクハラ嫌いの理由がよく分かる気がするぜ」
「俺は小さい頃から美紅と一緒に生活を共にしてきた。だから性教育なんて自然にできていた。君の場合さくらさんの用を手助けする事で性と間近に関わっている。だから君は成長しているんだ」
「ほめすぎだぜ、ちょっと」
「でも、この前こいつらは郊外の露天温泉に行って混浴してきたぜ…」
呆れ顔の呑。ユウキとさくらは顔を赤らめる。さくらの甘えん坊ぶりが広志には手に取るように分かっていたのだ。だから恥ずかしいところを見られてもさくらは安心できるのだ。
「君はユウキくんの事が好きだから、いつも一緒にいたがるんだろ」
「そうです、ユウキくんなら私の事を分かってくれるから」
「ユウキくんにとって大切な存在だ、大事にしろ」
広志に優しく言われてうなづくユウキ。
「俺が守って決めているんで、ヒロさん。それとこの前の涼宮ハルヒですけど…」
「奴は相変わらず黙秘だ。まあ、権利の一つだが、こっちは証拠でガン等締め込んでいるから文句は言えない」
「そうよね、ヒロくん」
呑の妻である郁子（ジェーン伊藤という変名を使い悪党を騙す事もある）がうなづく。
「ロンの周辺からあのメビウスに猛毒が渡っていた事が明らかになった。そうなれば、ロンとその周辺はメビウスと手を組んでいた事になる」

「大物を俺達が捕まえたって事か」
「まあな、だが真打ちが捕まらないと意味がない。いずれにしても君たちは大手柄をたてた事になる」
「良かった、手話の勉強をさせてもらって。久利生さんを誘ってここで講習を受けて正解だった」

「そうですか、あなたもいよいよ出撃ですか」
2日後の川崎のGIN本部。
「ああ、あのメビウスは我らREADにも目障りだからだ」
「ラディゲCEO、旧ミキストリの残党への牽制はどうでしょうかね」
「大丈夫だ、この私がいる限り奴らは君の前にひざまづく」
「何もひざまつかさなくても」
「そうそう、この前の実習は大成功だった。支援を受け入れてありがたい」
オリバー・ラディゲは感謝を伝える。広志は近くにいた天童竜に目配せすると竜は駆け寄る。
「あなたの知り合いに電話を代えようか」
「おお、ミスター天童か」
「ご名答。では、天童」
「久しぶりだな、ラディゲ」
「おまえか、声から変わったな」
「今度、イギリスに渡る。その際にお前とゆっくり話をしたい」
「そういえば、今度拳式だそうだな」
ラディゲは優しい声で聞く、竜は後輩の藍リエと婚約関係にあり、結婚式を挙げようとしていたのだ。
「それで、高野CEOのついでにイギリスで拳式となった。良ければ参列を願いたい」
「もちろん、参列させてくれ。しかし、高野CEOは厳しいだろう」
「今後、お前とも連携して動くよう命令を受けている。よろしく頼む」
「俺こそだ。お前は俺の良きライバルでもあり、親友だ。お前に死に水をとってもらう覚悟はできている」
ラディゲは言い切る。結城凱が広志にメモを持ってくる。一目で見ると広志は素早く指示を出す。
「そうか、READの皆本が訪問してきたなら、応接室に案内せよ」
「ああ、任せておけ」

そして、川崎郊外の小さな商店街の一角…。

「沢村さん、何とか間に合いそうですね」

「ああ、美鳥が時間をチェックしてくれて助かったぜ」

湘南総合大学・法学部2年の沢村正治と中学時代からの後輩で湘南総合大学・経済学部1年生の春日野美鳥が車に乗っていた。正治はアルバイト先の秋山飯店の主人である秋山醬に頼まれて業務用スーパーでネギや調味料を買ってきていたのだ。ちなみに実家がセレブである美鳥は秋山飯店で会計を担当している。

湘南総合大学といえば、関東連合の自治体が経営破綻した大学を共同で買収しただけあり、優秀な学生が集まっている。正治の在籍する法学部は法学大学院とも直結しており、優秀な弁護士を多く送り出している事で有名である。その事もあり、正治は美鳥との交際を許されている(美鳥の両親が公認しているほか、美鳥と一緒に入浴する事も容認されている、逆に言ってしまうと正治が結構努力家であると同時にまじめな性格であり、右左両利きの腕である)。

「結構厳しいけど、賄いはタダだし、住み込みで働かせてくれる。姉貴からようやく独立できたぜ」

「それに、学費も一部出しているんだから大変でしょ」

「醬さんのおさがりでいいさ。俺はそこまで欲は言わない。それに、料理まで教えてくれるんだから文句はない」

「最近、ヒロさん来ないのどうしてでしょうね」

「仕事だし忙しいんじゃないのか」

車を駐車場に入れると、二人は秋山飯店に入る。長髪の三白眼の男がニヤリと笑う。

「カカカカ!!待っていたぜ」

「店長、ただいま帰りました」

「すまねえな」

正治と美鳥が初デートで入った店がこの店で、醬の料理がすっかり気に入ってアルバイトを二人は始めた。醬の料理は真剣勝負そのものであり、あの味皇・村田雄二郎と味将軍・村田雄三郎が絶賛するほどだ。正治は独立のために、美鳥は内気な自分を変えたいという動機があった。

「明日、高野の奴がここに来るそうだ。特別室の準備をしてくれよ」

「分かりました」

「しかし、よく俺の店で働いてくれるな」

「何を言っているんですか、屋根裏部屋をタダで貸してくれて月10万円の給料ですよ、俺は感謝しています」

「美鳥ちゃんはあんたのいい奥さんになりそうね」

店の奥から女が出てくる。醬の妻で、五番町飯店オーナーの霧子である。ちなみに醬には厳格な料理人の祖父がいて幼い頃から英才教育を受けてきた。そのため背中に傷を受けてきた。霧子はさばさばした性格で、相手の気持ちを考えた料理が信念である。それ故、醬とはぶつかり合う事もあるが人格的には認め合う関係である。また、その性格は美鳥の性格を明るくしている。霧子は味皇グランプリに怪我を押して出場した醬を気遣い、自ら助手を務めるなど今では公私ともに欠かせない間柄になっている。

「あんた、うちの醬にそっくりだね」

「店長と!?!」

「カカカカ、キリコの言うとおりのだ。義侠心強くて、不器用で。しかも見かけが不良っぽい。いざという時には身を挺して守る。俺も

ここまでやられたら真似ができない。シャイなのは同じなんだがな」

「クスッ」

美鳥が醬に言われて苦笑する。正治は高校時代に美鳥とは別の高校だったがある大学教授が主催する論理的議論ゼミナールに通っていた。そして、正治と美鳥がメビウスの陰謀に巻き込まれようとは誰も考えなかった。

作者 後書き

今回、一定の形で決着をつけさせる話を何点かすすめています。外伝、本編、続編は時間の経過や書く人の思いで微妙にズレが出てきています。ですが、その違いを受け入れてこそが表現者としての力を高める結果になるのです。

本編ですが、作成段階と現段階ではかなりのタイムラグがあります。そこで、その補助を行う為に補足編を加えました。

ですが、技術には光と影があり、アインシュタインの研究がアメリカのおぞましい原子爆弾開発につながったようなケースが後を絶ちません。技術にも、進歩と同時に倫理観がついて行かねばならないのです(そういう意味では私はアメリカのトルーマン大統領を断じて許していません。彼は国際法上、ヒトラーや昭和天皇、スターリン、毛沢東、ポル・ポト、ムツソリーニ、小泉純一郎、ジョージ・ブッシュと同じく人道に反する犯罪を犯した大罪人なのは明らかなのです。我々は彼らを負の歴史上の人物である事を認識しなければなりません)。

憎悪だけで相手にぶつかっていても、相手はそれをなんとも思いません。逆に居直るだけなのです。

著作権元 明示

崖の上のポニョ (C)二馬力 (原作者・監督 宮崎駿氏に作品の著作権は帰属します)

バットマン (C)DC コミックス

仮面ライダーブレイド (C)東映・東映エージェンシー・石森プロ

スーパー戦隊シリーズ (C)東映・東映エージェンシー・テレビ朝日

逃走者 (C)ワーナーブラザーズ

美鳥の日々 (C)井上和郎・小学館 2002-2004

『鉄鍋のジャン!』 (C)西条真二・監修 おやまけいこ・秋田書店 1995-2000

特命! 刑事どん亀 (C)TBS・テレパック

恨み屋本舗シリーズ (C)栗原正尚・集英社

ウェルかめ (C)NHK 脚本:相良敦子

仮面ライダー龍騎 (C)テレビ朝日・東映・ADK

アグリーベティ (C)ABC 制作者 アメリカ・フェレーラ、エリック・メビウス

アキハバラ@DEEP (C)石田衣良・文藝春秋社

「名門! 第三野球部」(C) むつ利之・講談社

「クロサギ」(C)黒丸・夏原武・小学館

マルモのおきて (C)フジテレビ 2011

『デトロイトメタルシティ』:(C)若杉公德・白泉社 2005

ミスター味っ子 (C)寺沢大介・講談社 1986- 1989

『沈黙の艦隊』(C)かわぐちかいじ・講談社 1988-1996

『聖結晶アルパトロス』(C)若木民喜・小学館 2006

「舞姫 〜ディーヴァ〜」(C)原作:倉科遼、作画:大石知征・小学館

『金色のガッシュ!!』(C)雷句誠

コードギアス 反逆のルルーシュ ©SUNRISE/PROJECT GEASS・MBS Character Design ©2006 CLAMP

ディア・ドクター (C)監督・脚本 西川美和、配給 エンジンフィルム、アスミック・エース 2009

『のだめカンタービレ』(C)二ノ宮知子

小公女セーラ (C)日本アニメーション 原作:フランシス・ホジソン・バーネット「小公女」

『涼宮ハルヒシリーズ』(C)谷川流・角川書店

『美味しんぼ』(C)原作:雁屋哲、作画:花咲アキラ・小学館 1983-

インディ・ジョーンズ シリーズ (C) 原案 ジョージ・ルーカス、スティーブン・スピルバーグ 制作・ルーカスフィルム

祝!(ハピ☆ラキ)ビックリマン (C)LAD・テレビ朝日・東映アニメーション